

續像  
後集

山石見英雄錄

五  
輯  
七

遠  
2509  
33-35



門 遠  
2509  
卷 35-35

復讐言岩見英雄録第五輯卷之七

南海

玉藻主人編次



瑶婦密贈鴛鴦の鏡  
凡夫迷く搜は観音の籤

歌人の詞の海や初研駿河國薩埵山嶺と聞えり  
澳津川の東薩埵山の連峯ある山嘴ありて千尺の崖高く海  
上は聳聳と山下の磯邊を親不知子不知と呼做り遠く遠江津  
を南に望み高く富士山を東北に認る西の迹は清見渚あり天女  
も羽衣を結て遊ん江を隔て三保松原有度宛ら波間よ画く小似り  
東の方小田子浦まで那富士小似山も廻りて南へ伊豆の山々列れ  
り。現は漁舟火影寒く浪を焼く驛路鈴声夜山を過ぐ古へ

漢大歌鈴の  
三句の唐の

復讐言英雄録第五輯卷之七

杜若鶴侍  
 天竺又三年  
 二月甲午治  
 民於海東  
 忠文東征の  
 時海軍の  
 奥の宿せ  
 夜の軍監  
 海軍重藤  
 海上の事  
 笑しての  
 二句を朗  
 吟せり

より京と吾孀の官道ふして。當時相摸の小田原の武威関左八州ふ  
 震ふる。伊執力左京大夫平氏康朝臣北條との居城あり。海道一の繁  
 華なる大都會といふものあり。争亂世のゆゑにみれば王銚の道由人  
 の懐は東西のあはれと緑林の風は白波をげき海も山もも患害  
 の三夕かるといふ。夜の這頭も往還の人稀ある。今を以て古を一句に  
 論ぞなす。ば閑話休題はる。高野弥兵衛舉豪を那部語  
 めいふ。詐八百の松嶋八百八景美と口は信せ。假名を自家晤譚を  
 術もいひ。瞞を信れ。浦上室二郎宗久有髪八道親玄や路  
 ぞう。舉豪とらち語り。既薩藩の嶺に到り。半雲汗を納ん  
 とく。程の地方に笈を卸せ。舉豪も歩を駐えて。倍の疲を息ひ  
 て居り。時ふ六月十六夜天よく晴て月苦き。山氣肌は透徹て涼

また一鳥声。寂莫なる。峯上の風は松よ入て山の名も肩の薩  
 藩の琴を調る。心耳も不覺は清き。浮陀落山はゆる。波の  
 も。林鹿も車はく海潮音を。浮世の塵を洗ひぬべ。下瞰さ。波の  
 影。玉兔走り金龍跳は。昼より明た月光二十名の指を。とら  
 名勝。おらぬも。絶景。ふ宗久を。舉豪を。譽りて。喃八百八。和原  
 の本貫。奥州といひ。特。ふ。人。の。廟。字。も。同。名。の。松嶋宮城  
 の安藝の敷嶋丹後の天橋立と侶は。皇國の三景の隨一あり。や  
 貧道が久き。苗裔。出羽の由利郡象海も。八十八。河。九十九。嶋を  
 どの風景目を。駭。奇。観。あり。た。今。這。嶺。の。勝。覽。ハ。那。松。嶋。と。ハ  
 優劣。什麼。に。い。は。し。了。て。又。も。那。方。を。貪。着。する。解。情。と。主。張  
 ぶ。舉。豪。を。胡。意。言。や。ふ。ち。笑。あ。て。景。美。固。り。下。下。小。疎。暴。る。死

雅の田舎鬼みやまのいんがいにりて風流の道みやまのちゆうりゆう小暗みやまのこくられば天造の妙果あまのたけのまうくわを評品ひやうひんをなせ  
 高見たかみを。唯ただ心月こころづきを悦よろこむれみよけり。と云いひくも立廻たちまわるやうりて。  
 情なさけ小大こおほ刀やいばを抜脱ぬきだし。声こゑをも被おけられ親おや去さが背せより。馬うま然しかと瞬ひらへ刺洞さしあなせ  
 巴あや苦くると叫こゑで突つ小こ仆ふれてムも死してけり。拳こぶし豪たけなへ多おほ快たく屍骸しかいの帯おび  
 親おやて赤裸あかだ小こ剥むちて。大おほ刀やいば鍵かぎ見袋けんけんをもめ。東あづま西にし一個ひとつもムも骸しかいよ着き  
 けせび首くび移うつち放はなして屍しかいを破やぶち香かの磯いそへ踏ふて墮おち。枯かれ枝えだをど焼や材ざい  
 よ。ふべに東あづま西にしをうう集あめ。遠とほ遠とほく磁じ囊ふくろを挑ひりて火かを鑽く出だし。枯かれ枝えだ  
 小こ積つまて那な首くび級ぐいの頭あたま髪かみを造つくり焼や去さし尚なほムも面おもてを燻く焼やて。燻く焼やけ  
 熾さかりるを。涯がけより下くだへ擲なげ。暎て験けんを絶たち邪よこ智ち悪あく計けい。魃あひて笈あひの扁へん  
 鎖くわをバば鍵かぎ見けん袋けんを披ひちて東あづま西にし悉しつく。檢あみ。完ま尔ると笑わらちて僥う倖ま々々と  
 嘆なげ口くち氣き。造つく化け高たか妙まうと自みづか家か東あづま西にし貌かたちよ笈あひ列れつ被おき。澳あ津つの方かたぞ下くだり

有りあ理り天てん網わう恢くわい々々疎そりて漏はれ。今いま這こ宗そう久きうの親おや去さが枉か死しせし。ハ  
 罪つみをた小こ肖せうされども人ひとを識しの明めい鑒けんを。能たくも大おほ夏なつを明あまま自みづから  
 速すみけ。禍わざはひ殃やうが。ム父ちち村むら宗そう。虎こ狼ろうの心こゝろを逞たくましして去さる大おほ永えい二年に九月げつ  
 十二じふに日の夜よ小こ主ぬし君きみ赤あか松まつ上かみ総そう介け政せい村むら。入い道どう常じょう印いんあり。室むろ津つをを弑ころす。國くに  
 郡ぐんを奪うばひ。天てん罰ばつの十年じゅうねん。回まわり来きり。攝しや津つ國くに大おほ物もの浦うらの戦いくさ場ば。小こ破やぶらるて戦いくさ没ぼつする。逆さか家かの餘あま殃やう尚なほ盡じんべ。开ひら子こまで延ひる報むくじ  
 りのあ。バ。切きりて親おや小こ別わかれ。室むろ二に郎らう。屍しかい骸がいを留とどめ。荒あ磯いその名な  
 を親おや不知しらず子こ不知しらずとつ。怪あや死し因いん縁えんあり。人ひと。這こ次じ年ねん。永えい禄りく。宗そう景けいも。  
 逆さか臣しん憂うれ田でん直ちく家か小こ攻せめ悩なやはれ。終はる三月さんげつ十五じふご日にち小こ備び前ぜんの鬼おに嶋しま。よてムも  
 弑ころせられて國くに亡なび。爾しかも。爾しかも。出いて爾しかも。互ある。惡あく報ほうの争いくさ追おひ。由よしなれば。

まゝ那高野拳豪がぬりゆ末路を看官什麼と想像べし休題  
 再説拳豪いふ夜艾澳津の驛小宿り詰朝猛ふ這里より路を  
 踏て北を志し甲斐文國巨摩守郡身延山に詣て歇店ふ就に開  
 翌日より肩腰の骨疼みて行歩不便と云ふまでを元れども脚を  
 の骸骨より酸麻痛く店小二は囁て四下の醫を招た病症を  
 訊問し醫師は霎時診察ていひらるる這を全く濕毒の中り  
 ぬり。渡莫拙老がゆ濕毒と那俗の癩瘡とて然いふは又之  
 山野の濕氣雲霧鬱鬱蒸の瘴氣うて唐山の籍めつる瘴癘毒  
 即是なり。あゝ法印の諸國を修終あひく或は露宿一或は日  
 を累て深山を辿るひ緯ある。這の草根木皮の速く効を奏せ  
 此症ぬり隣國ある信濃の千隈牧諏訪をどの温泉は氣長く

浴をぬり必ぞ奇効あるべし。等閑ならずも生涯の廢人とあり  
 ぬべし。と劑をとり与へて帰ぬれば拳豪大に駭た憂ひて現思ひ  
 そ丁座なる時候奥の青葉山より下毛の二荒中ぞ山又山を日を経  
 て跋渉り故にあれ快く温泉ふ訪たて將息する不如の如し。と  
 笈を用いて那浦上村宗が親書の照書宗景が書札系圖の模写  
 蛭丸の短刀をどを納錯る撒金の文匣を拿出し入信箋領の衣  
 服小金創の靈丹も侶も偷藏て料理行装し宗久が大小の口をも  
 俺が副佩よめて做て袱小裏み又ム躬準備せし路費の外は略め  
 たる那三裏の黄金の勒肚しして肌は着ぬ然而逆旅主人小訛て  
 今より信濃の温泉は新た五十日許浴せんぞ不行轡を央ひく  
 給後憑てム間這笈の長物あり。和主は管けまぬらん中

小の東西も有りあつた。佛体を始めなり。渾て送方へ殺さ合ふぬ  
 れべ心錯る。那処の一隅も安置ぬり。絲綿路の流て危會をい  
 被付る。と房錢をど過分も心を籠て還し。跡で客舎を立出  
 て行轡小揺れ又馬小も騎つ。八月の廿日許。下諏訪小到り。十五日許  
 遊あつ。子浴をて全く健。八月の八日との。下諏訪を。程まで  
 岐岨路より美濃を経て。近江の大津小宿り。八同。是月十三日小  
 ぞ有有りける。然つ。大津。新聞を居て。但徠。輒々。這首。四下に  
 相識。わら。ム。ガ。券。書。を。得。て。初。せ。之。と。逆。旅。主人。が。示。せ。し。之。奉。家。の  
 駭。く。色。り。ぬ。曩。小。流。て。み。き。浦。上。宗。久。の。所。居。る。あり。ム。の。郡。三  
 井。寺。の。傍。ム。甲。一。年。出。羽。小。下。り。羽。黒。の。月。光。院。小。も。留。留。あ。つ。

与ふとて月光院の老法印より。此の人情及一封の書翰を寄されしと  
 ぞ。這。関。を。越。る。小。究。竟。の。便。宜。ふ。ま。て。开。物。件。も。皆。今。の。俺。に。帰。毫。  
 有。あ。そ。造。化。精。妙。り。な。れ。先。ム。僧。を。訪。て。関。符。を。巧。受。んと。石。山。に。到。し  
 小。那。僧。紀。伊。國。小。お。き。後。日。お。り。ま。六。只。得。大。津。の。飯。店。小。飯。り。来。つ。  
 有。係。急。緊。要。の。旅。あり。移。を。氣。長。く。も。紀。伊。路。より。去。て。歸。來。の  
 小。日。を。早。晚。知。れ。ば。人。を。等。向。の。不。樂。ま。唐。山。戰。國。の。子。血。嘗  
 君。が。函。谷。を。出。處。と。入。る。と。異。な。れ。ど。も。鶏。鳴。狗。泣。の。客。お。あ。れ。ば。鐵。の。小。由  
 り。関。の。門。や。逢。阪。山。の。莖。莖。緒。長。き。秋。の。夜。苦。き。も。人。は。知。れ。で。も。の  
 小。の。夜。も。睡。れ。ぞ。も。明。り。の。開。日。十六。の。黃。昏。小。隣。席。あり。二。房  
 小。主。従。と。思。ふ。男。女。四。五。名。の。旅。客。の。猛。み。を。来。し。ける。是。即。ち  
 牧。野。殿。衛。義。行。子。で。あり。あ。り。あ。り。と。奉。家。の。詎。と。も。知。る。由。无。り。に

日暮て廁せうに移うつりたる。簷廊えんらう接連つぎつぎなる。這方こゝろに隔壁くわくへきの浴室ゆいしやうあり。折まちも茂さかり。若わ黨たう鶉う喰く柵さく三十さんじゅう助すけ。這浴室こゝろに入いて浴ゆてをり。店小たんでん二にを呼よんで。這家こゝろの中ちゆうに田いん基ぎを然しかり。人ひとのあつた中ちゆうと問とは。五ごと答こたへ。い。空うつら迷ま憾げんと。この少すくな店小たんでん二にを。おんが。田いん基ぎを嗜しやうせ。や。止宿としまの客きやく。この中ちゆうに。おのり。方かたも。は。座ざら。い。圖家ずが。い。侍さむらい。は。と。い。は。三十さんじゅう助すけ。否いな。已い。們ら。の。詩うたも。語ことも。好このみ。あ。り。は。優う。艶えん。志し。た。あ。ま。害がい。害がい。の。乃すなは。ち。を。嗜しやうむ。如ごと。か。れ。已い。們ら。が。老らう。父ふ。耶や。も。丹波たんぱ。玉たま。の。肉にく。食く。して。御座おんざ。を。と。ど。も。令しやう。弟てい。不ふ。風ふう。く。う。政せい。所しよ。御領おんりやう。の。御眼おんまなこ。代しろ。の。職しやく。を。讓あづか。り。あ。ひ。て。別べつ。小せう。莊院じやうゐん。と。構かま。へ。世務せふ。の。を。拘こ。ら。せ。ぬ。を。富とみ。も。榮さか。え。む。ん。が。う。そ。間ま。暇ま。受う。け。れ。ば。平へい。生せい。の。客きやく。を。愛あい。して。特とく。に。田いん。基ぎ。を。好この。み。あ。り。今いま。番ばん。の。石山いしやま。へ。観くわん。月げつ。は。遊あそ。び。の。歸かへ。路じ。の。座ざ。を。せ。り。奥おく。さ。を。伴とも。を。せ。ぬ。上うへ。の。京きやう。まで。い。逗とど。留ど。ま。る。よ。

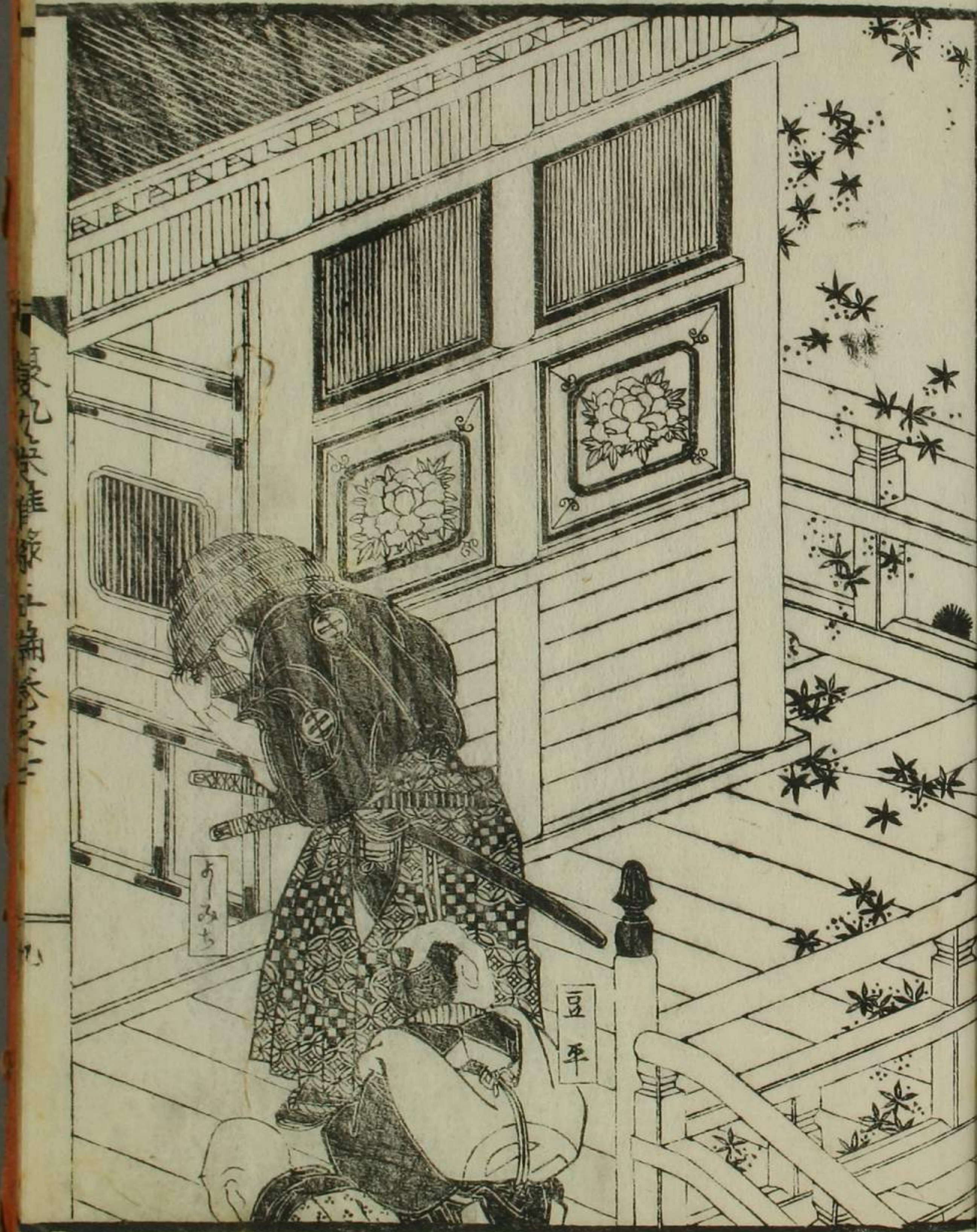
これバ明あきら。目め。の。心こころ。後のち。く。年とし。後のち。より。遠とほ。里り。を。立た。ち。出で。た。之の。京きやう。の。を。お。ん。朋とも。友とも。も。交あ。わ。れ。ど。も。朋とも。欲ほ。く。思おも。は。さ。る。今いま。夕ゆふ。迄まで。い。そ。思おも。ひ。被お。も。ぬ。死し。棋き。敵てき。を。紹しやう。介かい。す。あ。り。せ。ぬ。は。是こゝろ。上うへ。に。お。り。教しゆ。び。あ。り。ん。と。思おも。は。ぬ。之の。説せつ。誇かう。り。け。る。賣う。弄りやう。閑かん。話わ。を。奉ほう。家か。の。廁せう。に。在あ。り。不ふ。意い。も。听き。ぬ。海うみ。の。圖ず。基ぎ。ハ。ム。船ふね。群ぐん。の。超こえ。る。本ほん。事じ。あ。り。ま。ら。ぬ。心こころ。ち。肚はら。裏うら。の。義ぎ。道みち。の。副ふく。馴じゆん。て。閑かん。を。越こ。え。計けい。較けう。り。の。詰あひま。朝あさ。より。雨あめ。片かた。へ。ぬ。り。出で。し。を。奉ほう。家か。が。計けい。ム。機き。を。失うしな。は。し。た。田いん。基ぎ。子こ。を。敲たた。た。て。後のち。傍はた。を。欺あざむ。き。拒きやう。障じやう。の。閑かん。を。招まね。き。終つひ。に。後のち。傍はた。の。家か。に。誘いざな。ひ。を。抑おし。留とど。め。て。只ただ。得え。る。杖つゑ。を。駐とど。め。奉ほう。家か。も。東あづま。人ひと。と。お。り。一ひと。義ぎ。仍なほ。も。病まじ。世よ。に。結むす。び。一ひと。寛くわん。家か。の。や。恩おん。情じやう。翻ひん。て。多おほ。の。仇あひ。と。ある。や。決けつ。一ひと。災さい。の。端たん。を。ぞ。粵えつ。の。閑かん。た。り。る。現げん。恐おそ。れ。て。戒けい。慎しん。を。免めん。の。男おとこ。女めづ。の。情じやう。慾よく。形かたち。の。奉ほう。家か。の。始はじめ。め。より。備び。前ぜん。の。外ほか。に。浦うら。上うへ。宗そう。景けい。を。欺あざむ。き。て。發はつ。跡しやく。ん。と。水みづ。

道ありも雄々志大志。抱きよ義行のあやうれて。日毎其基を  
 圖み。詞敵とあつて遊びあふ。義行の母屋の西位に乾淨なる編室を  
 峯家が憩息所と做し。と。昼は屢擧豪を母屋に請ひて。岩瀑共  
 侶酒筵を披たて管待與ふぬ。然れば岩瀑が父阿片元青も亦日  
 毎に及湯が社院に出入りて。陪堂を勤むゆり。ふ自然峯家と親  
 くありぬ。まじく懇深に性極めて。淫婦も。年齢も尚抄弱く。今年  
 へ廿三あるを。二ツ許もわしと。倅稱一二十五の井の像に面影の  
 外物より肖ぬ。内心如夜叉始り殿衛が妾とあつ。終に正室は鳩鷹  
 一も。只是榮利の与りて。性を矯るる。女兒の水性。峯家が色白く  
 眉目清秀。まじく。信とあつる。男子風流に初。相見し。開時より人不  
 知。男の初め身は深ぼりの秋風吹れて。燃ゆる螢火の獨心を佳  
 まつ。適世ふ女子より。生れし。甲斐文ふ。信も郎は配偶人。あそ本意あつ  
 る。重たが上の小夜衣衿を襲ひ。淫婦ありとも。いそいそと。淫婦主より。郎を  
 の吩咐を黙止難て。家の与とあつ。れみ。あそ。躬を委はれ。心は深ぬ  
 郎も。年庚は。小動の五十を既。過未と。思へ。悔。腐り。縁  
 結ぶ。あう。左。世。老木。花。室。二。郎。ぬ。備前  
 の國主ある。浦上。宗景。の親弟。よて。國。も。歸り。一。城。の主。と。做  
 る。人。あつ。と。及。湯。ぬ。より。听。ぬ。れ。ば。這。方。さ。ぬ。は。愛。思。を。れ。ぬ。酒。家  
 も。爺。々。も。目。今。より。い。箴。く。倍。て。憑。若。紀。幸。ある。の。を。然。あ。く。とも。  
 非。徐。怎。ある。憂。苦。でも。又。淫。奔。鬼。の。浮。名。をも。那人。故。は。歎。ふ。ま  
 じ。恚。計。慕。ふ。赤。心。を。告。も。聞。ん。由。も。欲。得。と。亂。も。思。ひ。の。色。に  
 出。て。時。々。情。ふ。峯。家。を。視。も。目。は。送。る。秋。の。波。ゆ。ら。ぐ。許。の。心。緒。や。



花のよきぬ口形の色香も深た思ひし。惜と報せある。淫婦の情  
 態とムと拳豪も心捷くも悟りて。開躬素より好色の疾われ。バ  
 山岩瀑が容貌の艶妖なる心醉神迷ひて有る。若くも有主花  
 をも思ひ上り。小舟より大志を抱いて。前途は樂む。若くも。倘那処まで  
 志を得ば。野の美女を不見。若くも。妻妾とせん。も。能く。情慾  
 の衝動。心以て心を抑替。思ひ絶。時ありける。思ひたや。那方も  
 俺を思ふ。と。神魂漂蕩。不覚。海狂。意馬心猿。牽。羈。絆  
 はれて。争ひを暗けん。終。暮。醜態痴情。著。婆。扁。鵲。が。茶。も。  
 救ふ術。相。思。病。の。人。も。力。も。殺。せ。る。不。義。の。栄。利。を。謀。り。し。候。  
 花も。得。開。ぬ。埋。れ。木。の。子。の。形。果。ぞ。流。す。た。有。右。程。は。拳。豪。の。し。り。も  
 の。大。夏。を。うち。遺。忘。れ。一。回。山。岩。瀑。と。密。會。を。遂。ん。り。の。と。虚。々。と。あ。ら。う。

居る。日。と。銷。を。す。て。ふ。便。點。を。得。り。先。圖。の。者。の。心。を  
 攬。んと。て。黄。金。の。有。り。信。せ。て。録。め。各。種。の。物。件。を。調。錯。て。牧。野  
 若。黨。鞋。奴。侍。女。炊。婢。小。堅。よ。む。る。留。留。介。の。教。を。表。し  
 たり。襪。扇。兒。或。の。擲。竹。筒。照。子。囊。佩。具。卷。帛。を。ど。を。屢。贈。り。  
 時。と。て。い。事。は。託。けて。日。用。錢。を。合。せ。刺。阿。片。元。青。が。許。へ。も。儲。を。賜  
 り。或。の。酒。錢。と。歸。て。黄。白。を。與。へ。萬。は。垂。に。拳。動。ぬ。れ。甲。も。も。大。家  
 拳。豪。を。愛。飲。び。て。好。人。が。ぬ。は。在。せ。り。と。謂。ぬ。も。た。不。知。て。山。岩。瀑。の。俺。が  
 意。中。人。の。縛。か。れ。何。日。まで。留。錯。て。情。慾。を。遂。ん。り。た。と。後。傍。を。よ  
 だ。ふ。哄。誘。を。よ。後。傍。を。只。管。山。岩。瀑。の。老。鈍。氣。し。う。ふ。開。船。も。富。家  
 閑。兒。を。れ。良。友。を。得。り。た。と。思。ひ。し。れ。ば。拳。豪。が。留。留。介。の。く。く。人。縛  
 を。心。は。欲。り。て。一。切。の。發。程。を。催。さ。ば。八。月。の。中。院。より。冬。の。季。子。ぞ。る



りより。ム間ふ岩瀑と奉家ハ良便宜を得て初て密會し。或  
 義行が外に出る緯あは。鎖穴隙踰牆奇く。逢時あり。或  
 磐瀑ハ心地すく氣鬱て人を見り。此言被らるも。瀬と。年齒ハ十四五  
 ころ。名ハ海木と呼。腹心の雛婢のみを身邊小侍らせて。殿衛を  
 先甲乙をも。迹づけ。二三日許。俺が周房も。童一々奉家を  
 延容て。悄々地ハ快樂を取。時もあり。られど。三次の外ハ。海り會て互  
 小彌増。恋々の情慾。歩る瀬を。た。修。山石瀑を。奉家と再會し。十時  
 におん。為真。不妻を。憐み。ぬ。折を。主張ひ。什麼も。て。這家を。潜出  
 人程。は。侶。は。備前へ。將て。仍。之。と。撥口。説。は。ほど。奉家ハ。女流を。將て。路  
 次の。間も。那。処。は。ても。量。は。便。強。可。けれ。ば。宗。久。獨。り。先。那。地。は。仍  
 て。香。々。登。の。城主。と。なり。後。俺。妹。を。迎。の。密。使。を。おん。為。が。元。元。青。老  
 の。許。まで。進。了。せん。俺。這。里。を。出。ぬ。後。元。青。老。ハ。慝。ま。げ。情。由。を。告  
 て。父子。共。侶。小。情。は。下。る。準備。を。等。あ。ひ。孫。ハ。使。は。齋。せん。後。日。の。證  
 の。符。を。ご。方。才。先。俺。妹。は。進。了。せん。と。短。中。刀。ハ。付。離。合。掃。枝。を。抽。出。て。  
 岩。瀑。ハ。熟。と。見。せ。夫。が。一。隻。を。ご。遞。与。す。ぞ。山。石。瀑。も。日。來。愛。せ。瑤。瑤  
 の。櫛。一。枝。と。す。古。金。襪。の。袋。ハ。入。一。枚。の。懷。中。照。子。の。背。ハ。葎。間。小。戲  
 る。鴛。鴦。の。形。を。鑄。造。を。奉。家。ハ。贈。り。て。い。ひ。け。る。中。一。件。ハ。要。時  
 も。別。れ。す。の。う。せ。一。間。を。妻。女。と。お。ま。て。おん。為。の。膚。ハ。朝。夕。纏。て。ぬ。る。松。  
 ま。の。一。件。ハ。妻。女。を。迎。の。人。ハ。掃。枝。の。一。隻。と。侶。ハ。齋。し。お。ひ。孫。と。推。言。海  
 盟。山。で。血。を。濺。だ。る。推。言。詞。の。文。を。送。は。拿。も。交。け。義。行。ハ。任。意。も。知。ら  
 ぬ。間。暇。を。め。れ。が。奉。家。を。母。屋。ハ。招。た。て。目。と。て。酒。麴。遊。む。ぬ。あ。と。も。ぬ。  
 岩。瀑。も。付。々。汗。席。よ。て。然。る。ぬ。さ。ぬ。奉。家。を。郷。食。忘。り。奉。家。ハ。兩

夏九先佳集上編卷之二

二番備前より帰ると告別も義仍の今年も既に暮れ近う。前途  
 萬福征旅ふして遠からぬ國あが。後會も國り回た長き別は付るか  
 一。御舎見浦上殿より智勇の臣も乏かづける國持の大家おれは如憂田  
 們若たが叛たりとて。這に僅少ある内亂にて國家危急存亡の秋もあ  
 同是我家より年を送りて来ん春も快く初め一汗時の游て初めま  
 うせ。と強ちふ初田れは拳豪もま。肚裏も女々々も一妻ががらも若  
 瀑より列を愛みて。縦計密會あそ隨意ありぬ日毎も汗容貌を足  
 てり此言彼の言々も亦憎かづべとあ。同ト岩瀑も宗二郎ぬの豆  
 留も今此子の餘波はゆ座せあり。とて款待あ。大か。お。ひ。拳豪  
 が鶏を嗜みま。と。特。雞子を好あり。と。听てれば家は飼る雞の  
 牛卵ハ新あ。て。市は。蹴。南。げ。る。東西。優。れ。り。と。屢。隸。奴。を。捕

せ。け。ム。を。煮。炙。ま。て。薦。め。或。ハ。酒。酌。は。伍。て。拳。豪。が。居。る。離。根。亭。へ  
 持。て。遣。を。ど。ま。け。り。有。一。日。隸。奴。を。家。鶏。の。埒。に。階。子。を。て。搦。拳。登。り。と。  
 栖。宿。の。中。を。攪。索。り。の。卵。を。奪。る。は。汗。母。雞。が。愛。み。て。や。跳。蕩。て。隸  
 奴。が。頬。尖。と。虎。口。を。距。り。て。一。叩。は。蹴。り。と。あ。隸。奴。ハ。嗔。り。て。這。畜。生。奴  
 阿。主。の。要。は。用。ひ。の。を。知。ぞ。や。と。罵。り。て。竹。の。箠。り。て。うち。拂。ふ。雌。の。隻。脚  
 うち。折。て。△。助。も。些。見。傷。き。ハ。撲。地。と。天。井。は。滾。び。墮。て。頻。に。哀。叫。し  
 と。岩。瀑。の。意。置。置。た。畜。生。哉。所。詮。活。す。き。東。西。な。れ。む。調。理。ま。て。客。が  
 終。り。も。俺。仗。も。午。饌。薦。め。進。り。せ。ん。と。件。の。隸。奴。ハ。吩咐。て。躬。て。殺。ま。て  
 肉。を。煮。焼。せ。し。を。義。仍。と。拳。豪。不。薦。て。後。ふ。云。々。と。話。す。あ。る。義  
 仍。ハ。畜。生。を。殺。せ。し。を。快。ま。や。あ。ひ。ら。ん。雞。肉。を。薦。め。ん。と。毎。日。は。幾。隻  
 を。需。り。と。も。輒。死。り。の。を。怠。て。飼。鳥。を。情。け。り。の。せ。り。や。元。青。老。の。菜。も

て救ふ活もさうりけらん。と云ふ岩瀑も笑ふ。ん宣いも譯をさ  
 妾も开首は脱落のけり。あれも傷も軽くあつぬ。隻脚は不具  
 ろう。残廢雜を救ふ倒る痛もたつ。と思ひて憐れ計をひゆると  
 奮い海ども義行の海で什麼ともいふり。憊り目を經る程は有一夕  
 主人義行を赤馬より跨りて。そこ知り漫行きて意甚樂し  
 二作麼をん這馬猛り。狂騰て主を墮はんとするを。鎮ん手  
 る処ふ側より一個の武士見れ出て。義行を執て曳下し。閃一闪と馬ふ  
 ろち騎に詎とい知らぬ又一個後方よりきて。義行を尚伴せぬ薄氷  
 の深田の中へ真倒る排擠はれて。苦と叫ぶ俺声耳ふ响つ愕然として  
 驚醒せば是即南柯の一夢なり。陪枕ある岩瀑もうち駭れて。辰湯  
 が背を拊摩り。這を汗ふ即彼も濡る。何れも。什麼も厭見とあやと詠れ  
 辰湯へ吻と息吐て夢中の光景を語り。方方尚胸動きて覺ゆれ。  
 呀思ひたはるの状凶兆いあり。げや。と吟たり。を岩瀑へ詠も夢  
 兆の倒るといふ果敢る。とを。かんきよを係ゆ。と左右も慰めぬ。  
 五六月過ぎる。家鶏の雄が兩夕まで頻ふ甲夜晨きて。辰湯の  
 弥甚意は係て。左右も氣を屈し。快々として樂ま。山岩瀑も兀自  
 那鶏をも殺さぬ。と云ふを。殿衛の兄が久く飼も畜し。のを雌を既  
 に殺せし。復雄をも恣罪を。殺した。俺快くぬ。那が甲夜晨  
 二隔昨宵の夢を思ひ合せて。家も不祥のあつ。と云ふ。と云ふ。  
 岩瀑も意弱あつ。を。聞え。よ。然。許。を。思。ふ。殺。は。川。邊。へ  
 も流し棄て。不祥を禳ひ。拾収人もゆるべ。又赤馬の夢も有  
 る。おん。穴。生。寺。の。觀。世。音。并。ふ。詣。通。夜。まで。も。行。り。之。那

御寺の本尊の知れずと。這御佛より馬頭觀音の號を以て  
 ませばと陽の然も正首は徳通の陰の隙に舉る家と密  
 會んと女子の智慧も憎むべし計較ありと。知れぬ義道領を  
 て。絶え流すも否ぬも。俺穴生より歸る後。明日那寺  
 小謂を隔明日の午牌後より歸るべし。と準備して。次日は豆平  
 一名を伴當として。急ぎ宿所を出る。抑本州桑田郡穴生  
 の村あり菩提寺は龜山城の西街稍盡處なり。八上篠山官道あり。  
 左邊は距り八町餘十町は足らざらん。世俗の西國三十三番の體  
 所の隨一処。二十。天曆帝の御宇。二年。  
 穴生の高富守治宮成が建る所。洛下の價工眼清が作る靈  
 聖親りて。今茲永祿の戊辰。十一月。五日。五百餘年の靈場あり  
 と隨歸きて。香火の道俗いと多かり。表詔不題牧野義約の黃と現  
 の怪異を以て怪み。恐る小人の迷惑。得知ぬ所の仇。大虫と名  
 言ん。女賊と妖媚。さかると牙。か。と。や家を毀傷の面皮。白死銀  
 鼠の穴生村。来り。直ち菩提寺に至り。香願みて。通夜を  
 べ。由を告げ。祈禱料にて。東西不匿捨与。去れば。躬て知事僧出来  
 りて。客房に請り。管待ける。供て。義約の公服袴を。より。雨入り。めて  
 本堂の價前。小。多。謹て。香を焼たて。黙禱を。徹。一。ム。夜。艾。日。終  
 宵經を誦し。睡み。せ。法施。ま。めて。明。志。る。登。時。籤。筒。を  
 會て。南。无。大。慈。大。悲。の。觀。世。音。并。將。來。の。吉。凶。を。示。す。て。穴。助。の。力  
 を。加。へ。ひ。秘。し。う。ち。念。じて。眼。見。を。因。謹。て。靈。籤。を。抽。ひ。身。十九。籤。を  
 得。り。五。言。四。句。の。偈。を。題。して。

冤業牝鷄禍

吹其身自煎

馮心岩壓卵力

怨毒滅除全

とありなれども。義の文字は疎けを解へるに肯て釋へる終る。末の  
 一句は怨毒滅除の字あれは。その意は。その意は。その意は。その意は。  
 れ終る。生憎不掛意て。それ。その意は。その意は。その意は。その意は。  
 示。開吉古を證る。この意は。この意は。この意は。この意は。  
 れ。九慮の冤知り。此の意は。此の意は。此の意は。此の意は。  
 尾を垂ぬ。厄難消滅疑ひあら。この意は。この意は。この意は。この意は。  
 肥の心地は。且歎を。尚も祈禱の。この意は。この意は。この意は。この意は。  
 傍をいと愉快げ。肯ひ。點家。この意は。この意は。この意は。この意は。  
 牧野。主僕をば。管待て。この意は。この意は。この意は。この意は。

暗廊燭滅を季々月の風暴

幽室燭青一四更天の鳥啼

紀前勸復説岩瀑の緯。この意は。この意は。この意は。この意は。  
 を穴生寺へ。早天より。出き。この意は。この意は。この意は。この意は。  
 て。去り。今日。良人の。在。この意は。この意は。この意は。この意は。  
 徒然。思。思。程。この意は。この意は。この意は。この意は。  
 不。庵。福。掙。札。の。救。忙。を。この意は。この意は。この意は。この意は。  
 と。を。此。の。意。は。此。の。意。は。此。の。意。は。此。の。意。は。  
 何。幾。の。海。膽。醬。茹。も。單。相。思。を。この意は。この意は。この意は。この意は。  
 見。千。々。の。心。を。碎。死。栗。人。と。使。この意は。この意は。この意は。この意は。  
 と。燒。新。小。禽。塩。小。剛。鬚。氣。魚。什。麼。の。情。節。の。嗜。む。と。听。雞。子。他。

是任せむを親らふ多りて幾重巻腐皮の所を嫌ふ給層の帯  
 紐かして釋せもあれと干瓢の同心結やよ昆布緑の断ち後の世までと  
 引く糸長た蓮根の心濁れる泥水よ家考きも汚れといひさ素次丸や  
 青磁の盆或は黒漆描金の簞盤盒ふ仕衣做の一半を分て。這は明日は  
 人の歸らせぬ。駿西倦困は進する夜消の盃の準備ももとと云はく  
 小坂厨子藏也汗一半を散よ木地臘の吸筒を合副て拳家居る編  
 房へ餉りきん。使の隸僕を喚り。耐よ猛心地巧く氣煩重を隸  
 女左中右やら口状を吩咐て遣る。若黨鴉喰栖三十助も侍廿  
 子まで丙丁も家公の歸めきて。万よ意を着く。留守も終渡。莫ま  
 窮屈なりぬや。介意形く酒でも喫て心を遣は。昼の間の浦上ぬ  
 を母屋へ傳きて慰めせんと。否とも客さのは意ゆきて細く

欺待より志松折りく家公の在せぬ。妻が心地の平生ありぬ。這  
 は前番の病患の再發よ。一兩日の悩老か。人噫樹厨陶や。懶げ  
 に雛婢を足領。あを喃梁や。妻が房へ侶来。て頭を麻子く  
 給り。とよおすも亦重げ。詐病の双眉をうち。頬帯ゆる。先景  
 を揚。妻妃が酒は悩姿態。西子が心を痛失。容顔想像。豊  
 妻の婀娜ある粧ひ。女子ありとも。羨み妬ん。係ふ。鐵石なり。狂夫  
 の心魂蕩々。もも理あり。有之程。よ拳を家居。編室へ隸。酒散  
 を送り来て。山石瀑がいひも。會め。口誼をのべて。今日。夫も。穴生の寺へ  
 通夜の祈願。よ詣。侍れば。明日の午牌。後。お。帰。り。侍。ね。ば。然  
 こそ。客。の。の。蕭。閑。小。在。らん。を。細。心。慰。め。存。ん。と。ふ。臆。脂。東。西。を  
 かん。笑。ふ。供。侍。折。り。く。妻。も。前。番。の。病。よ。同。心。地。よ。て。房。舎。ふ。うち





我乃  
暗子  
高野が  
毒  
中ら

中 卧作りぬれど留守せる男女も、糸心懸けたり、緯交かりぬべし。昼の  
 間、母屋に入らば、ひて大家ふおん心を副ぬり、ねば、宛敷たたりふおん  
 片を、れ、遠き遠方の得な勝を、かれ、何れ、何れ、君が、た、志、あ、べし。と  
 いひ、六、奉、家、風、くも、开、意、を、猜、り、厚、く、謝、を、演、て、使、の、蒼、頭、を、帰  
 らせ、ら、が、丹、夜、艾、潜、て、岩、瀑、が、閨、房、ふ、お、た、り、お、岩、瀑、々、々、心、の、通、り、や  
 嬉、あ、く、も、お、ん、容、顔、を、入、る、あ、と、よ、と、歡、喜、大、概、や、り、准、備、の、下、物、會、出、り、  
 奉、家、と、酒、を、斟、り、り、。及、湯、が、赤、馬、の、夢、と、鷄、の、甲、夜、晨、を、関、心、を、語、り  
 ぞ、ム、を、幸、ふ、任、心、々、計、て、侍、り、み、た、信、を、今、宵、心、寛、て、譚、ひ、め、り、り、  
 知、り、終、ど、鍼、あ、る、蜂、の、片、ん、片、れ、つ、共、侶、の、癖、を、寒、江、を、忘、れ、  
 くら、泉、互、は、會、話、り、愛、惜、の、雲、弥、深、く、終、夜、快、樂、を、食、て、取、り、飽、ぬ、岩、瀑  
 へ、別、れ、慳、く、て、翌、夜、の、又、の、逢、瀬、を、約、ま、り、奉、家、へ、明、日、へ、主、人、の、帰、来、ん、ふ

い、て、开、夜、を、期、定、た、や、と、い、ふ、遠、方、へ、本、意、を、け、お、世、お、も、男、と、お、の、心、強、死、者  
 ぶ、お、ん、お、ひ、お、れ、不、思、議、の、縁、結、り、か、う、へ、共、侶、お、幾、世、を、經、て、誓、い、と、契、る、もの  
 ち、ら、樂、い、短、た、蘆、の、薄、命、今、年、も、今、一、旬、餘、は、逼、り、り、春、う、り、形、最、愛  
 だ、お、ん、お、不、好、り、も、棄、れ、ん、那、如、一、霎、の、間、あり、り、。峯、上、隔、る、山、雞、の、尾、の  
 長、た、夜、を、人、知、り、は、泣、つ、幾、夜、明、片、ん、の、悲、た、東、西、を、知、て、お、心、は、海、ぬ、老、人  
 赤、い、陪、枕、せん、耐、巨、た、憂、を、老、ぬ、い、あ、り、ば、や、と、獨、沈、吟、み、れ、竹、の、世、お、苦、肉、の  
 計、と、や、い、あ、り、の、五、と、一、爺、お、逆、て、听、く、現、お、お、を、苦、め、て、お、も、要、耐、嬉、た、緯、も  
 あ、れ、と、今、番、も、早、衰、の、日、の、若、ふ、氣、鬱、の、病、を、託、け、て、人、を、四、下、お、迹、け、ひ、む。  
 明、夜、と、も、妨、害、い、あ、り、り、。お、れ、ど、も、日、子、數、を、累、る、を、酸、酒、三、昧、お、緯、敗、ぬ、べし。  
 然、る、と、も、阿、漕、が、浦、に、糖、く、綱、の、度、重、れ、お、露、人、信、れ、お、今、明、夕、を、涯、と、思、ふ  
 逢、瀬、お、も、お、ん、東、西、を、什、麼、ぞ、や、。お、は、命、も、捨、る、ま、て、お、最、終、お、妾、お、心、も、

似ぞもふん為の薄情翌の一夜を歎かむ。思ひぬ久後も強面の主の  
 心の中より口説き怨心する。袖は餘りて膝の上ふ涙の雨とぬり濺ぐ。潜  
 び多る音は啼び聲を餘りて口説きあてられて左右に説きも實れぬ。  
 穿くも羽立の夜艾に折言ふ折かす曉を。報復や家鶏の一声不憚りはれ  
 て起出づ。噫無情鶏や。這奴の兩名が仇なれ。と吐たあかき聲別れぬ。  
 案下某生再説。牧野殿衛義仍を翌日 十二月 十五日 未牌後左側へ帰り  
 志に三十助男侍女が奥さぬを昨の午前より。心氣鬱て人をこるも  
 懶と宣ひて雛婢の梁一名を伴陪堂小かん国房へ籠らせぬ。然れ  
 ぬが 二次の饌の毫許でも喫ぬを去そ歎きゆり。と告る。後清を屢頷た  
 今も時候も然あまに。運を所謂那痴症ありぬと言ひ。駭て国門  
 まで。情とめて。周相が岩瀑に卧被の表は花曇襦の小横をうち被て

地爐は力を寄せて。梁小背を拊麻手らせて。素く織中を右の腕を  
 額小加へ物お顔よりち卧る。髻の四下は鬢髻曾髻の玉を毛片頬  
 に破乱々々と被れる。光系雨は惱める。海棠の花顔懶くも。睡不足風  
 情あり。後清を一霎久在て。喃々岩瀑心地は。念よと。呼門若ふ。あうを  
 細めて。諧被れ。重かち。又一頭を劣り。拾げて。帰らせぬ。歎き。言ふるも  
 什麼。緯も。今。霎時。情小。允。け。せ。ぬ。嘆。煩。悶。く。て。耐。回。阿。梁。快。く。額  
 を。摩。て。と。と。も。敢。て。躬。を。横。は。ま。ふ。り。ち。卧。り。梁。を。會。妻。集。り。り。と  
 額を。按摩。の。左。の。虎。口。うち。掉。て。惜。地。は。主。小。示。す。く。べ。後。清。を。悟。て  
 快く。俺。便。室。へ。却。た。奴。任。て。後。清。を。奉。家。を。母。屋。へ。招。き。て。去。る。夜。の。友  
 ぼく。甲。夜。晨。鷄。の。怪。異。を。讓。人。と。喜。授。寺。に。詣。て。通。夜。せ。緯。を。説。了  
 り。て。這。へ。恥。づ。志。死。内。所。話。小。い。が。在。下。か。身。左。馬。權。允。義。順。を。即。ち。本。郡。の

眼代よて性厳格く文武の道も羨むをしが企及へし一器量  
ある者あり志が在下が荆妻岩瀑を継室よき。這一機不慮て甚く  
在下が心よ負た兄弟の義絶ふ及びし。早四年もぞりやる。一時の  
角口より恚も形りしを今悔まき思ひし。知て這番の若た掛意の事  
也。他と回背考てみんゆ在在下が愚昧を醒もた商量の柱をんよと  
のみよて緋も形。幸小浦上ぬし。累不修驗道も入せぬ。形れは年何  
這靈籤の意味を判考て听せぬ。秘と写録錯し四句の文を示そ。そ  
も我れが夢杖の怪たる靈佛の籤と听む。鄙語よ不症。身脚の心裏安  
く。況文字は精も何れ。大膽不敵の檻杵児をれば。城よ戴  
一讀し。漸く及清より對して。牧野ぬし。何ぞ。宗々の可賀  
籤文の面吹と見え。乃者の事をも合ふ。先送初は寛業北條初

吹其身自煎と。那牝雞が前世の業因で。卵を取るを寛みて。勅心  
小人も通しより。刃を傷け終に殺されて。煎らる。至し。他が自業  
自得の禍を。指て言ふ。似り。憑岩屋。卵力。怨毒滅除。全よへ  
源遠岩と。矢札形。令政。岩瀑の偏諱あり。然れば。雄奴が雌をば  
亡し。怨も。甲夜晨せ。怪異を去。令政の計ひ。ひいて。恐怖疑惑  
の心。尚その遺せる。卵をも調理せ。せぬ。妖も勝ち。怪を厭する。勇  
猛力。やれば。那雌雄の鶏が。執念深。怨害毒。悪の妖氣も。全く滅除  
せん。との。執も。あそ有。れ。恚れ。残る。雄鶏をも。放ち。棄て。殃を。穢ひ  
か。と。傍若無人。不道。破る。僻論も。辨説巧。あり。あ。義。仍。耳。新  
る。明辨。妙論。胸胸。用けて。と。面色も。爽愉快。負。ふ。ん。あ。る。象  
依て。愁を。掃。火。酒。よ。若。飽。で。喫。で。妄想。雜念を。洗。久。か。同

を仕んと催せば辰湯のうち笑み然之と鼻へ懸て盃を出して日暮  
 よて飲ふらん。奉象も量高けれど思ふ由おむら身い然許飲も  
 百端不程擲て大白を頻小主人に浮ける程不義の大小爛酔し席  
 不も耐は又はれば奉象を侍せし主人のおん臥蓐の設せらるべし。酒家  
 も酷く酔されば快く就寝侍らんと離根亭へ帰りたる。恁て五更左  
 右と思ふは時候不義の睡り醒て廁不のぬ浄を去終て便室の卧  
 蓐へ歸る。當下酔い全く醒ねども。游覧も結むれむ。岩瀑が病着  
 へ作廢あらん。潜て動静を窺んと手燭を秉て簷廊侍ひ。奥の方へお  
 たり。奉象の夜艾も岩瀑が閨へ入りて戯れ遊び目今う起別と。兩  
 三房閨門より潜出て簷廊へ被りたる。撞見首小手燭の火先去向の方  
 より這方へ来る。主人辰湯と見てければ避躲ん。地方もなす。了得乃

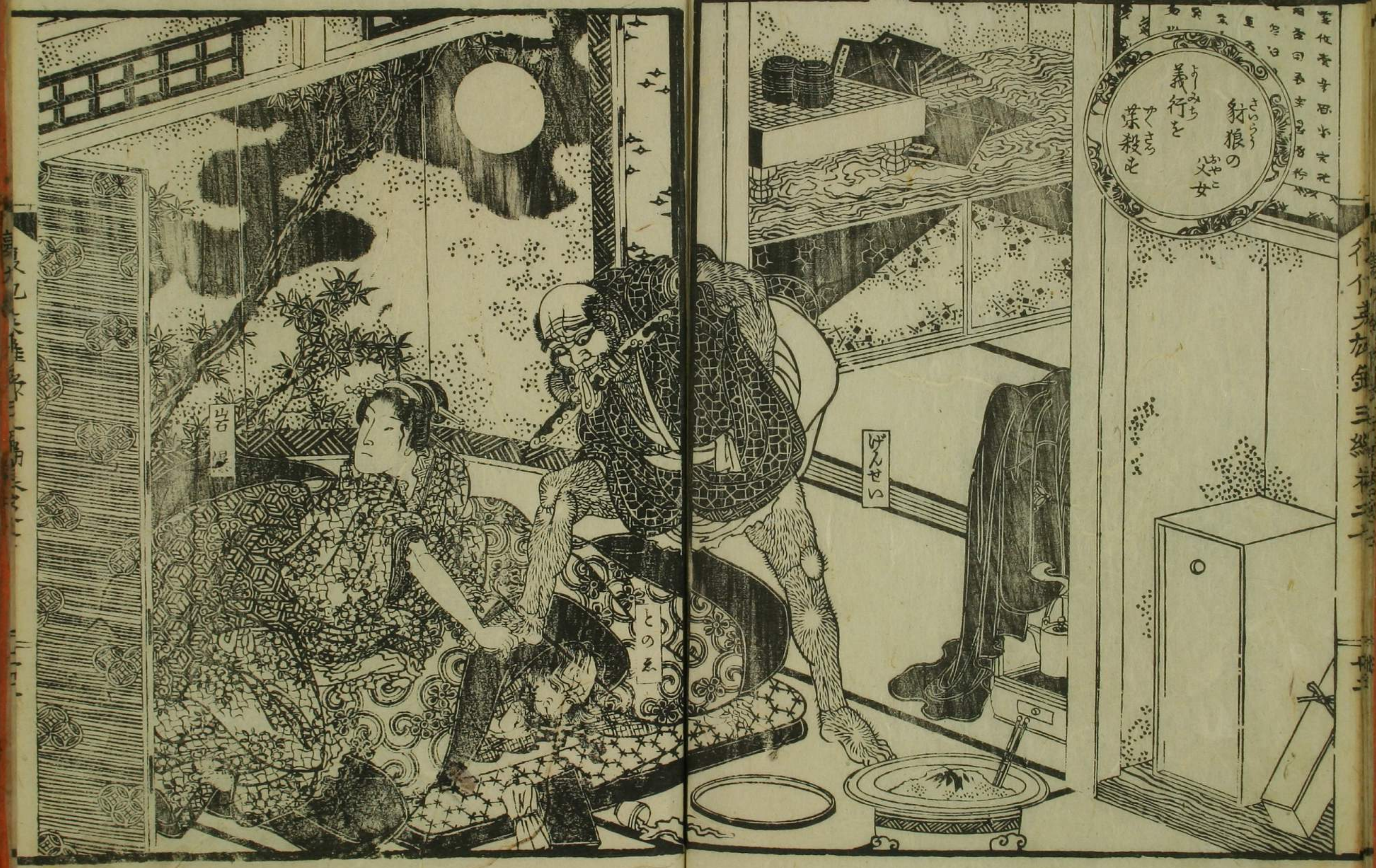
奉象思ひも。三歩巡遠せし脚頭不礙と礙一。手燭おそよ東  
 西かれ。と隻を小合にて擲着。標的錯つて手燭を丁と撃墜し。冷灰の  
 四下不流と散ら辰湯を駭た賊あり出會と叫り。あは小暗地方。人影  
 の不在を捕んと走蒐て組を奉象振はたせんとする。を捜度と依  
 義の尚組んど。寄を透し。奉象が修鍊の白打小膳を托地と  
 擲られて。云と許は義の平張伏て。霎時ハ氣息をうら。去独領く  
 擧象の自捷く。辰湯が中刀を奪畧り。遂て岩瀑が計らひ。懸鎖樞  
 を脱措する。簷廊の角門扇より脱去り。有如之くも。這里ハ面亭の  
 方へ最遠は。詎も知ら。岩瀑を辰湯が賊ありと叫ぶ。声を聴く。が  
 原来。情節の被認着て。敗衄去よ。と口管寒心せし。速に烈を  
 り。此响の圓寂とせし。恁に。情と客子を。王張人と。細末小燭と

乗せて前より立せ。惶恐形なく出て来り。侍れ。度湯を足らう。も。嬉しく  
も。侍郎を逃れし。よ。あ。それ。あ。れ。と。思。ふ。の。か。う。尚。安。ら。ぬ。胸。を。鎮。壓。して。涙。を  
ま。て。左。右。より。義。兵。を。扶。起。し。耳。根。小。口。は。し。よ。せて。老。爺。さ。ぬ。俺。伏。喃。と。述。ぶ  
屢。喚。活。ら。れ。義。兵。の。息。出。て。心。を。我。に。復。さ。す。侍。付。小。刀。の。鐔。を。て  
打。撲。ま。す。や。胃。酷。く。痛。疼。て。述。ぶ。果。敢。ま。さ。く。ハ。言。ぬ。を。岩。瀑。を。妻。が。病。死  
強。半。小。瘡。り。侍。り。お。ん。が。を。什。麼。ま。か。ふ。か。と。頼。み。同。じ。義。兵。の。御。小。堂。路  
を。説。話。て。朽。情。や。武。士。さ。る。者。が。檻。杓。兎。を。捕。り。は。だ。割。へ。中。丁。を。使。し。奪。れ  
志。と。思。ふ。る。あ。そ。安。か。ら。ぬ。年。末。俺。莊。院。小。嘸。囉。も。入。る。元。日。の。小。田。夜。辰  
の。鷲。よ。志。お。と。る。道。も。亦。一。措。の。不。祥。あ。ら。う。苦。け。ま。ら。ぬ。梁。を。市。し。岩。瀑。も。お  
駭。ら。る。面。色。あ。て。原。来。方。才。の。の。响。ハ。偷。見。の。入。志。も。快。く。大。家。を。喚。起。し。終。と  
園。原。の。四。カ。女。を。喚。集。て。縁。由。を。告。示。し。先。侍。女。們。と。共。偃。み。義。兵。の。志。を。興。ま

り。一室へ扶入に。勦りぬられ。三十助。豆平。ム。他。老。僕。小。斯。農。夫。の。丙。丁。們  
岩。瀑。が。咄。咄。と。角。門。戸。の。開。き。賊。を。這。里。り。逃。し。久。又。ハ。那。地。に。潛。屈。を。る。小  
中。と。内。外。の。庭。前。を。ゆ。め。り。も。あり。門。より。外。へ。出。る。も。あり。鄙。語。よ。り。擧。げ。後。の。棒  
三。昧。紛。雜。ま。ん。方。も。か。ら。岩。瀑。ハ。急。に。元。青。を。迎。来。て。度。湯。が。身。辺。小  
侍。と。せ。ず。離。離。涙。ま。小。厮。一。名。を。附。て。拳。豪。の。情。由。を。告。賊。ハ。既。小。逃。れ。ぬ。と  
笑。へ。は。れ。ば。客。も。も。安。堵。さ。せ。あ。ら。う。と。云。は。し。陰。に。拳。豪。が。上。を。防。み。て。ハ。安。否  
を。窺。ひ。つ。送。方。の。先。を。さ。す。も。報。せ。し。針。較。あ。ら。ぬ。拳。豪。が。解。支。さ。る。曲。者。を。れ  
ば。う。ち。驚。愕。さ。る。面。色。も。さ。す。袴。の。紐。を。結。も。敢。て。便。と。信。小。母。屋。小。来。て。度。湯。が。病  
著。を。訪。慰。め。元。青。岩。瀑。小。緯。の。仔。細。を。尚。も。委。曲。又。詢。問。す。要。安。時。ら。う。譚  
ま。り。居。る。間。外。小。出。り。者。們。が。那。中。刀。を。南。面。の。耳。房。の。外。面。に。拾。ひ。こ  
て。合。手。帰。り。ぬ。這。る。偷。見。ゆ。が。勝。て。る。遺。す。お。れ。と。言。あ。り。拳。豪。が。俺。を

國小中志と心裏に独笑み馳て諸人よれ程小顔言まで夜明て後小  
 離根亭へ歸りり然る程小慶湯が胸痛轉劇きて明一六日十六日より次月  
 まで六心地死べく苦あそて快く都る女見新月を迎て歸り松又久く不和  
 の間かれも旁左馬允小俺暴病よりて對面志死由をいひ進み那必は  
 来るべし欲言緯寸切止不義順は逢て弟掛念の緯を没せん小快々鳥居  
 へ使を遣はせと屢言されて岩瀑を疑惑て尙我身上の緯よりゆきと心裡  
 小酷く駭恐れて応はされと捨措ぬ元青も亦義順を鬱悒く思ひしり  
 那れ心は遠縁を喜ぶに憊て月日午牌後小義行酷く苛らちて左馬允  
 采来欵他は親立目の職及近属不祥の緯どもの判断をも思ふは使を遣は  
 否や曾渡たは數言を云ふそと叱らして岩瀑の伴て男長小甲を遣はちと昨  
 夜々半後よりの大雪は路はどろどろや尚歸作は三十助旅詎あうと海て

走せゆんと公帝を立出て一室はむり父の元青を情と速たて半响許親  
 子送小耳語を元青の舉家居る乾淨房へ封けは岩瀑を慶湯が臥  
 内へおたふら一室ありて元青の母屋は歸り嚮の一室へ岩瀑を喚て海志をわ  
 商量を元青這里中在ぬ舉家と父女元青の外に知人もある秘密の魂胆謀合  
 きて元青の病人の身邊へおたふら湯何くれ意を着れば岩瀑へ少頃後れ  
 て来りり義行が枕をくくし寄て方オム甲が歸て付るが鳥居の相公義行  
 を隔昨日公更小官人源三郎を將て京よりおひぬれど遠方の動靜を  
 听せぬひて内君雪松の喜りある驚た怒ひて翌日俺使の歸かふべれど兄君の  
 然思しぬ全は昔聞小せられんやとて隨便かん迎の急使を飛遣かひと稟作り  
 たり欺誦ぬれば義行の笑をげはあを領たれも夜艾はよ那が釣の雄が甲夜  
 晨きて特小雨りければ岩瀑を慶湯が意を慰んとて哄誘て終小翌日十二月十八日



長乙三権家一冊六

義行を  
深殺を  
豺狼の  
父や女

行々其金三然社二



小隸奴は吩咐雄鶏を藤田川へぞ流し棄けせり。日も次日も左馬允  
 源二郎のまじりしほど帰らば新月を病ありてをど講ければ義紗の等不  
 樂て頻小使を遣はし使をり。遮莫目前まで元青親子が調合の煎を以  
 親は湯候毒嘗を誂みて薦め。菜の驗も昨より今二十日と云す。云  
 天候の胸痛少瘥りぬと。甲夜より疲れて胸容をれば岩瀑親子  
 と梁と三名で今夜の陪堂也。と云他の看病の男女の遠間より疲  
 ゐん小休息と云く辱らぬ初夜過る時候小梁の頻小坐睡しを。  
 岩瀑は揺醒て三房計隔一地方におてたふ処又衾褥もあれば小刻  
 息を就寢する。亮隔礮とひた圖けり。既りて亥中刻の月が高  
 ち丑時候あり。若く風はかたし凛として栖宿の禽もかく霜の稠きを  
 苦べの燈光瘦て燭も青く昏睡貌あるに義紗の展替て湯を去る。

天の授与と元青岩瀑辞齊を給好おん菜も湯成て作り。這を喫せ  
 やといふ口渴ゆる附れむ快々と使て起る。岩瀑が撃出せ菜碗を  
 小合て両喫許ふ喫聲。浴枕兒は憑ける。霎時ありて猛一聲苦げ小  
 叫と等く岩瀑の横を度傍が頭より。うち被胃せり乘蒐てム躬を鎮石よ  
 遍勇の力を極て壓れば元青も多捷く外套を行燈ふうち被て衣衾  
 を端より返す。女兒の力を戮せしむ。悩むべし義紗の手足を拵れむとも克  
 此些兒は力を盡す。呼苦声も口隠す。抑縮られ。重衾小蒸。斂れ  
 て呼吸絶えらん。春燈もせびぬる。に恠哉横の左袂より一團の土同燐隠々  
 とて流星状尾を曳り窓間より外面へ烟氣の若ふ閃々。駭てや栖宿の鳥  
 啼つれて霎時の噪止ぬる。けり。畢竟後話怎ふ編を接て第六輯の始は釋ん  
 復讐言岩見英雄録第五輯卷之七終

王藻浦人編述岩見英雄錄第五輯

繡像

葛飾為齋畫



浄書

浪華 水原政二郎

棗人

京攝三家合刻

安政四年歲次丁巳春正月吉日發兌

文榮堂



繡像後傳言山石見英雄錄第六輯

七冊 嗣出

このへん 結局大意の七輯の末話にて山石見程香子の後傳云を助より桂松老翁が種香との奇逢由良山嶽の賊帥ホのひと記

心齋橋南久寶寺町北二入

浪華書林

同

伊丹屋善兵衛

北久寶寺町南二入 河内屋源七郎



製小處

前川源七郎

心齋橋通北久寶寺

山田三十八番地

